霧が丘六丁目まちづくり推進ニュース Vol.11

横浜市「地域緑のまちづくり」助成に推進会の事業提案が採択されました。

2017 年 11 月、横浜市の「地域緑のまちづくり」事業に霧が丘六丁目まちづくり推進会が提案した街の緑化プランが二次選考を通過し、見事採択されました！　これは緑化事業に賛同してくださった地域の皆さんのお力によるものと、推進会のメンバー一同喜んでいます。

今回のプランの内容は前号でお伝えしたように、レモンをシンボルツリーにした街の緑化計画です。二次選考ではプラン名を「観て、食べて、祭りでみどりを体感！ みどりで交流！」とし、プランの内容が伝わりやすいように工夫しました。審査の結果は、個人宅を中心とした植栽によって確実に緑化が進む計画性と、多数の協力者を集めている実績が高い評価を獲得しました。一方、組織力・団体力の項目は評価が低めとなりました。これは、この助成金に申請する団体の多くが長い年月地域の緑化活動を行っている団体であることから、相対的に推進会の評価が下がったものと考えられます。メンバーは、今後の継続した活動によって克服していきたいと考えています。

この採択を受けて、霧が丘六丁目まちづくり推進会は 12 月 16 日の例会で事業推進のための「みどりアップ部会」を発足させ、運営委員長に今回の申請を中心的に担当した高橋鉄雄さん（霧が丘六丁目在住）を選任しました。「今回の緑化計画づくりを通して地域の環境整備の重要性を痛感しました。助成事業の採択はあくまで呼び水で、本来の目的は活動の中身の充実であると考えています。これからが本番と思って気を引き締めていきたいと思いますので、引き続き皆さまのご協力をよろしくお願いいたします」と高橋さん。

本事業では賛同者、協働者を募っています。関心をおもちの方は、佐東または高橋までご連絡ください。

佐東（TEL：090-7945-0644）
高橋（Email：tetsuo-t@goo.jp）

横浜 13版　2017年(平成29年)12月29日(金)　朝日新聞

レモン×緑でまちおこしを

緑区霧が丘住民「みどりアップ部会」

レモンを植樹して街並みを明るくしたい――。横浜市緑区霧が丘6丁目の住民が、レモンなど柑橘類で緑化し、まちおこしをしようと取り組んでいる。郊外型の住宅地として開発されて約40年。高齢世帯も増える中、住民たちがまちの魅力を高めようと動き出した。

活動の主体は、市認定の地域まちづくり組織「霧が丘六丁目まちづくり推進会」の中にある「みどりアップ部会」のメンバー。さわやかなレモンの木で通りを彩り、ゆくゆくは加工品でPRする狙いだ。

同部会によると、霧が丘6丁目には、戸建てを中心に住宅が約300戸ある。1979年に、最初の住宅建築が始まったという。郊外型の住宅地として開発された「新興住宅地」も、年月が過ぎてその姿は変わってきた。

約10年前には、地区にあった小学校が廃校になった。住宅地とは別にあった栗林や雑木林、家庭菜園などの「緑」は、相続の関係からか、次々と分譲住宅となった。従来の戸建て住宅でも、高齢化を理由に庭木の手入れが難しくなった家も少なくない。

「街全体の緑が減ったという意見が多く出されるようになった」と同部会役員の杉崎俊一さん(58)は話す。同推進会の中にみどりアップ部会をつくり、緑化を進めることになった。同地区内には、レモンやミカンなどの柑橘類を庭に植えている住宅があり、それもヒントになった。

柑橘類の中でも、レモンは1年目に肥料や水やりをマメにする必要はあるが、それ以降は比較的手が掛からないといい、「レモンの木で緑が増え、黄色い実がなれば通りも明るくなる」と杉崎さん。

個人の負担を軽くするため、市が募集する「地域緑のまちづくり事業」に計画を提案し、今年11月中旬に認められた。1年で最大500万円の助成金が得られる見込みで、苗の購入費のほか、水やりの負担を軽くする雨水タンクの設置などに充てる予定だ。

30軒以上から参加の意向が示されているといい、将来は収穫したレモンでジャムやジュースなどの加工も手がけたいと考えている。

子どもが独立し、高齢世帯が増えると、以前に比べて住民同士の交流は少なくなった。「レモンという共通の話題はコミュニケーションに役立つ。実現できれば情報も集まり、助け合いや防災、防犯にもつながる」。杉崎さんらは「レモンのまちづくり」に別の目標も見つめている。

「まちの魅力がなくなったら空き家だらけになり、助け合いもなくなる」と杉崎さん。「住民主導でやらないと、郊外型住宅地の活性化モデルにしたい」。杉崎さんたち住民の挑戦が続く。（大脇真矢）

レモンの植樹でまちおこしを進めている、霧が丘六丁目まちづくり推進会みどりアップ部会のメンバーら＝同会提供

高齢化進み「通り明るく」加工品も検討

レモンによる緑化について知らせる「霧が丘六丁目まちづくり推進会」のチラシ

今回の採択のニュースが朝日新聞の地域版（2017 年 12 月 29 日）に紹介されたほか、タウンニュース緑区版（2017 年 12 月 7 日）でも取り上げられました。

まちづくりデザインプロセスの専門家

東京工業大学・那須聖研究室に行ってきました。

昨年末、まちづくり推進会のメンバーが東京工業大学建築学系准教授・那須聖先生の研究室を訪問しました。那須先生は、富士山麓にある廃校(旧精進湖小学校跡地)の活用アイデアコンテストに研究室の学生と昨年応募し、最優秀賞を受賞されました。その流れから、大学の近隣で小学校跡地を含めたまちづくりに取り組んでいる推進会の活動に関心をもち、ご招待くださったのです。

緑に囲まれたキャンパスにある 20 階の研究室からは、新宿の高層ビル群や丹沢の山々が一望できます。その研究室で、受賞した精進小学校の活用プランをスライドを見ながら伺いました。旧精進小学校は人口 25,329 人、9,616 世帯(平成 27 年国勢調査)の富士河口湖町の精進地区にあり、平成 23 年に統廃合により閉校になりました。青木ヶ原の樹海に囲まれ、富士山を一望できる自然豊かな地区で、住民の多くが民宿などの観光に携わっています。那須研究室のプランでは、住民の交流や活動の場として廃校を利用するだけでなく、観光に訪れる人も食事や自然観察を楽しめる施設提案がされていました。

旧霧が丘第一小学校は教育機関を誘致する前提で横浜市が事業者調査を行っており、精進小学校とは状況が異なりますが、住民のニーズを積極的にプランに生かしているところは参考になりそうです。「コンテストには精進小学校を卒業した高校生も参加していました。どのように使っていきたいかは、実際に住んで利用していく人の意見が大切です」との先生の言葉が印象的でした。この訪問を機に、旧第一小跡地地域共有部の活用ワークショップも実現(詳細別紙)し、よい関係が築けそうです。

1 月 21 日(日)開催のワークショップ案内より

新シリーズ まちづくりコラム (1) 尾道の巻

地域緑のまちづくり事業が採択され、霧が丘六丁目のまちづくりも盛り上がって来ましたね。いま、全国のあちこちで、地域主導のまちづくりが盛り上がりを見せています。この新コーナーでは、そんなまちづくりの事例を紹介していきます。第 1 回目に取り上げるのは、広島県尾道市の「NPO 法人尾道空き家再生プロジェクト」です。

尾道は、みなさんご存知、瀬戸内海と山に囲まれた斜面に古くからの街並みが残る地域です。数々の名画が撮影された場所としても知られていますので、ご存知の方も多いかと思います。そんな尾道ですが、古くからの狭い通路、石段が仇となって古い民家の空家が増え問題となっていました。

そこに豊田雅子さんという若い女性が結婚を機に尾道に戻り、古民家を改修しはじめ、それをブログで発信する事で、同世代の方たちからたくさんの共感を得ることになりました。それをきっかけに、豊田さんは尾道の空家の再生を手がけるようになり、今では個人宅だけなく、旅館だった空き家の再生も手がけるようになって、全国的に知られる存在となっています。

豊田さんが代表を務める「NPO 法人尾道空き家再生プロジェクト」は、空き家の再生を地域の若手が中心に行い、市民が再生事業に参加できるワークショップを開催するなど、地域コミュニティの再生を担っています。また空き家の所有者と移住希望者のマッチングを進める空き家再生バンクの運営を市から受託し、高齢者と若い世代をつなげる活動も行っています。さらに最近では、ゲストハウスの運営で地域の雇用の場を生み出すなど、活動を広げています。

小さなことの積み重ねが相乗効果を生み、街を変えるきっかけになるそんな事例。空き家が増えてくることが予想される霧が丘六丁目でも参考になる事例ではないでしょうか。では、また次回！

＊出典：NPO 法人尾道空き家再生プロジェクト HP「再生事例 01 旧和泉家別邸　通称ガウディハウス」
NPO 法人尾道空き家再生プロジェクト http://www.onomichisaisei.com/

霧が丘六丁目まちづくり推進ニュース Vol.11[2018 年 1 月号]
発　行：霧が丘六丁目まちづくり推進会
問合先：090-7945-0644（佐東）
https://kirigaoka6choume.jimdo.com/

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
2030年に向けて世界が合意した「持続可能な開発目標」です

11 住み続けられるまちづくりを

国連持続可能な開発目標 SDGs 達成に向け取り組みます。